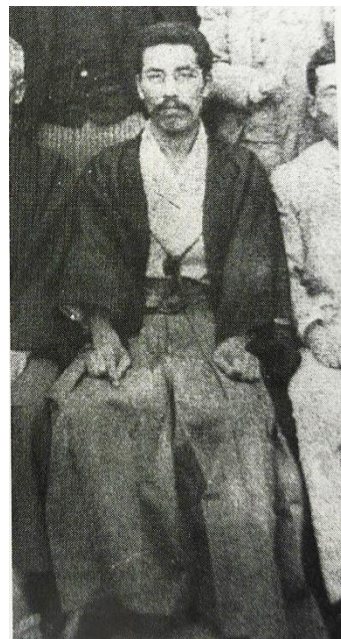


「鎌倉保育園」における保育事業の歴史

1. 腰越保育園（1896～1905）

鎌倉保育園（現鎌倉児童ホーム）は、1896（M29）年、佐竹音次郎が「腰越医院」に併設した「腰越保育園」に始まる。腰越医院の開業は1894年、その翌年に結婚した同郷（高知県幡多郡下田）の沖本くまとともに、保育園の運営に力を注いだ。



山梨県立病院時代の音次郎

〈腰越と音次郎〉

音次郎は幼い時養子に出されたり、養父母の離婚で実家へ帰されたり、農民に学問はいらないと学校をやめさせられたり、とつらい幼少期だった。しかし世の中の人のためになりたいという思いで医師を志し、医学専門学校済生学舎を卒業後、山梨県立病院に勤め、学生時代一夏を過ごした腰越で開業した。

腰越はもともと小さな漁村で、別荘に住む裕福な人たちがいた半面、付近に多くの貧しい家庭があった。ある時結核患者の娘を感染から防ぐために面倒を見ることになり、同じ



沖本くま

ころ相談に来た未婚の母子を引き取ることを見かけにして、腰越保育園を開設することになった。音次郎は医業で得た収入をこの保育園の運営に充てた。

〈「保育園」への思い〉

児童養護施設に「保育園」と名付けたのは音次郎が初めてであった。当時の孤児院は5歳以上の児童を対象とした施設であったが、「三つ子の魂」という言葉があるように、音次郎は乳幼児期の愛育が大切であるとの信念で乳児から引き取った。孤児も一旦引き取って我が子として養育するのだから、もう孤児ではないと、実子と全く同様にはぐくみ育てた。また、子供たちだけでなく不幸な婦人や老人たちもひきとり、「院は一つの家族」という考えで腰越保育園を運営した。

こうした思いは1902 (M35) 年に鎌倉メソジスト教会において夫妻で受洗し、キリスト教の教えと結びつき、音次郎の生涯を通じての聖愛主義の理想を追求する姿勢にもつながっていた。



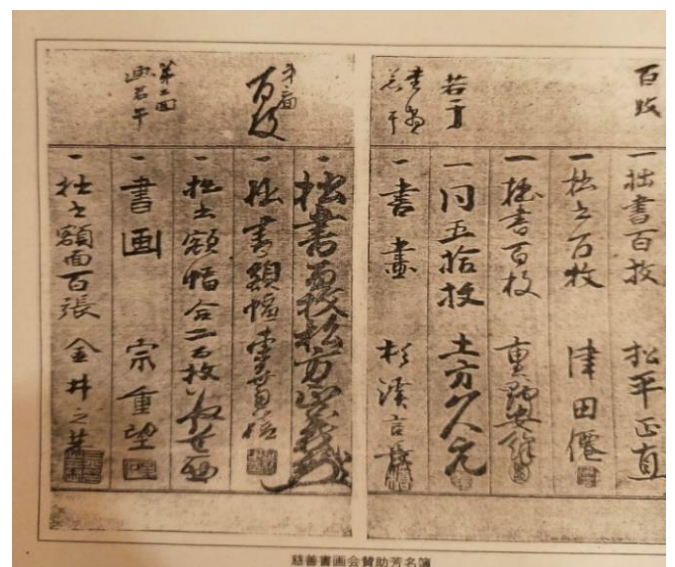
腰越医院の庭にて

〈鎌倉への移転〉

1902（M35）年、監獄内で保育されていた**女子受刑者の乳児**たちが分離保育されることになり、**腰越保育園に委嘱**された。収容人数がしだいに増え、保育舎が手狭になった。

1905年の正月から水痘、百日咳が蔓延し、音次郎の四女愛子を含む二児を失った。この事から音次郎は医院と保育園の分離を図り、もっと広いところをと現在の鎌倉佐助に地所を求めた。保育事業に専念する決意をした音次郎は、医師を廃業し、腰越医院は音次郎の意思を引き継いだ義姉の沖本幸子（妻くまの姉）に委ねた。

保育園の運営は腰越医院の医業収入が主であり、賛助者からの寄付による収入もあったが財政は破綻寸前であった。しかし鎌倉への移転に際しては、個人から多額の寄付があり、政府の高官や名士、有名な書家、画家、僧侶などに揮毫を依頼し、その作品を販売する慈善書画会でも多くの寄付を集めた。



慈善書画会賛助芳名簿

津田仙や松方正義の名前がみられる

2. 鎌倉小児保育園

(1906～1919)

1906 (M39) 年、鎌倉へ移転し、「**鎌倉小児保育園**」と改称した。保育園における「家族」は血



移転した鎌倉小児保育園

縁や戸籍にかかわりなく、自らを「園父」、妻のくまを「園母」、互いをおじさん、おばさん、お兄さん、お姉さんと呼び合い、絶対平等であった。

〈苦難を乗り越えて〉

1910年には、家族は46人になっていた。音次郎は病気がちであり、くまは大勢の子供たちの園母であるとともに、寄付集めなど園外の仕事もあって休む間もない毎日であった。そんな中で長男献太郎が5歳で夭折し、くまは悲嘆のあまり一時園から姿を消した。この苦境の中、実子を含む年長女子5人が夫妻の献身犠牲に忠誠を誓い、保育に携わる道を選んだ。

〈昼間保育奉仕の開始〉

1913年、**昼間保育奉仕（無料）**が始まった。それは年長

女子らが小学校卒業後に、明治幼稚園で保育実習をして幼児教育を学んでいたことによる。保育実習が発展し、商店などの幼児を昼間だけ預かり世話をする、いわゆる託児所の開設であった。のち、年長女子らが台北の愛育幼稚園に渡ったため、この活動は5年ほどで終了した。



保母代わりをしていた少女たち

1913 (T2) 年より、鎌倉郡からの補助金交付も始まったが、保育園の運営は常に苦しかった。地元の支援者の支えもあり、1910年に県下初の鎌倉、腰越、片瀬在住の婦人たちによる鎌倉保育園後援会ができ、後援会主催の慈善音楽会やバザーもたびたび行われた。

3. 財団法人「鎌倉保育園」(1920~1951)

1920年には財団法人に認可され、「**鎌倉保育園**」と改称した。この園には、子供たちだけでなく、婦人や老人まで収容した。音次郎は初代理事に就任し、土地建物など私財全部を財団に寄付した。役員たちにも私有財産の所持を禁止する規定を設けたため、古くからの関係者の中にも、園から離れていく人が少なからずいた。

〈関東大震災で被害を受ける〉

1923 (T12) 年の関東大震災で園舎は全壊、2 児を失い、腰越医院も倒壊し、義姉の沖本幸子も犠牲となった。当時の鎌倉保育園は 70 人もの大所帯であり、悲しんでいる暇はなかった。天幕、バラック用材で仮園舎を建て、官公庁からの物資及び用材の寄付を受け、震災復興国庫補助金、慈善書画会開催などを経て、翌年 12 月新園舎が落成した。

4. 海外に展開した福祉事業

音次郎は成長し自立した娘や家族たちとともに、当時日本が植民地としていた各地で福祉事業を拡大していった。

旅順支部…1912 (M45) 年、済生学舎時代の学友を頼り慈善書画会開催のために満州に渡った音次郎は、鎌倉保育園の年長男子たちの修養と鍛錬のために旅順が「屈強の教育地」だと実感し、ここを海外展開の出発点として翌年旅順支部（後の「**愛育園**」）を開設した。また、非行児童の感化事業として 1932 (S7) 年には「**大連分園**」を設立した。

京城支部…同じく 1912 年、朝鮮でも多くの不遇児童の救済事業に取り組む京城（現ソウル）支部を設立した。さらに 1923 年には**付帯事業として幼稚園**を新設した。

台北支部…幼児の売買が盛んだった当時の台湾の状況を知った音次郎の三女花の熱意により、1915（T4）年に台北支部を設立した。1917年には、台湾の一般家庭から要望の強かった「**愛育幼稚園**」を設立し、鎌倉保育園から年長女子が台湾に渡り、台湾語を習い保育に従事した。その後も台北では「**私立台北託児所**」や**母子寮**を併設した。

北京支部…1938（S13）年には、戦渦に苦しむ中国本土の児童のために「北京支部」が設立された。

〈敗戦と海外支部の閉鎖〉

だが1945年、敗戦とともに海外の全支部は閉鎖を余儀なくされた。各支部の創立以来の入所人員は、旅順、大連、北京支部関係は合計798名、京城支部は1,104名、台北支部の母子収容は1,044名、保育児は6,880名にも及んだ。

1936年、次女伸の夫佐竹昇が理事に就任した。「我は社会の厠掃除夫なり」と自任していた音次郎は、日中戦争さなかの1940年、77歳で死去した。

鎌倉保育園は現在も鎌倉佐助に、児童養護施設の社会福祉法人「鎌倉児童ホーム」として存在する。